

歴史の中の女たち

<第 10 回>

英雄の姉マリア・アントニア

伊藤 滋子



キュラソーに向う船の中で、マリア・アントニアはまだこみ上げてくる怒りを抑えかねていた。カラカスの中心にある彼女の家に突然弟シモン・ボリバルの遣いだという兵士数人が現れ、夫と彼女と4人の子供を慰撫だが有無を言わさない態度で馬車に押し込み、グアイラの港まで運んで船に乗せたのだ。家財道具などはそのまま、持って来られたのはわずかな身の回りの品だけであった。

カラカスでも屈指の名家であるボリバル家の祖先は市の創設に参加し、スペイン王から現在も市の象徴となっているライオンの紋章

を授けられた。一族は特権を与えられ、多くの荘園や奴隷、土地、借家を所有し、町の中心に家を構え、教会では最前列の席で奴隷に従えてじゅうたんを使うことを許されていた。だが8才の時に父が、14才の時に母が亡くなると、喪も明けない内に彼女と妹は相次いで結婚させられ、夫の庇護を受けるようになった。持参金は8万ペソという莫大な額で、夫は彼女よりも31才も年長の、同じ曾祖父を持つ近い親戚である。まだ12才の妹フアナの夫は母方の従兄で、父方の祖父の弟でもある。社会の上層部はこのような政略結婚で家柄と経済的基盤を維持してきた。

名家の主婦として平穏に暮らしていたマリア・アントニアであったが、18世紀最後の年、社会に変化の兆しが現れた。スペインからの独立をめざす陰謀が発覚し、首謀者が処刑されたのだ。さらに1806年にはスペインに反旗をひるがえしたミランダが軍を率いてベネズエラに上陸しようとした。この時もまだ、カラカスのクリオリョはミランダの首に賞金を賭けるために寄付を募った。マリア・アントニアの夫は20ペソ、夫の兄は50ペソ、広場の物売りたちまで何がしかの寄付をしている。

しかし1810年4月19日、カラカスで革命委員会が結成され、独立が宣言されたとき、彼女は心底驚いた。夫の兄をはじめ、ミランダの首に賭ける賞金を出した同じ人たちがこ

の委員会に入り、独立宣言に署名しているではないか。しかも自分の第二人と妹フアナの夫は中でも中心的な役割を担っているというのだ。弟たちは親から引き継いだ莫大な財産を独立運動に投じ、上の弟フアン・ビセンテはアメリカに、下の弟シモンはイギリスに渡り、それぞれの政府の支援を要請したばかりか、シモンの方はミランダに会って独立運動を推進するためにベネズエラに帰国するように促したというのだ。

もうマリア・アントニアにとっては理解しがたいことばかりだった。今のままの平和で調和のとれた階級社会を保持していくことに何の不满があるのだろうか。彼女の母は親戚に潤沢な資金を持たせてスペイン宮廷に送り、長男のフアン・ビセンテに爵位を授けてもらうように運動をしていたほどである。結局それは成功しなかったが、何を好んでこれまで持っていた特権や財産を賭してまで、自分たちを守ってくれる王国の権威を踏み躪ろうとするのか。彼女は王権派と共和国派の対立で騒然となったカラカスにいたたまれず、夫や子供たちと田舎の荘園に避難した。が、対立が激化してくるとそこも安全ではなくなり、またカラカスに舞い戻る。この頃、上の弟フアン・ビセンテは7万ペソという私財を投じてアメリカで買い付けた武器をもって帰国しようとしたが、船が難破し武器もろとも海に沈んで帰らぬ人となった。ヨーロッパから戻った下の弟シモンが住む実家は彼女の家のすぐ側で、共和国を樹立したミランダ派の溜まり場となっていた。その中には伯父、夫の兄、妹フアナの夫や息子など多くの親戚がいたが、マリア・アントニアは彼らとは一線を画し、王権派の立場を貫いた。しばらくして、大地震がカラカスを襲ったのを契機にミランダ政権は1年で崩壊、シモンも戦いに敗れて国外に逃れる。

彼女はこれで王権も安泰かと喜んだが、それも束の間、弟は1年も経たないうちに、現在のコロンビアの共和国派と手を結び、西の方からカラカスへ攻め上ってきた。その開戦宣言は、「スペイン人よ、もしベネズエラ解放のために尽くさないならば、たとえそれが無関心の故といえども汝らに死を！ アメリカ大陸の民よ、たとえ汝らに罪があったとしても生を」と結ばれており、王権派の人々を震撼させた。マリア・アントニアもその言葉は自分に向けられている様に感じておののくが、無頼の徒と化した群衆から迫害されるスペイン人を身を挺して守り、自分の荘園に匿って保護した。彼女は独立派の人々からは裏切り者と非難され、「虚栄の貴族」とあざけられたが、いかなるものも彼女の信念を変えることはできなかった。

しかし彼女の願いとは裏腹に、ついに1813年8月、シモン・ボリバルはカラカスに凱旋した。彼はいまや共和国軍の最高責任者であり、『解放者』の称号を贈られた英雄である。彼の家は再び独立派の中心となったが、以前と同じように、すぐ近くに住む姉は絶対にそこに近づこうとせず、頑なに王権派に留まり続けた。同じ年の末ナポレオンがスペインから撤退すると、王権派が勢いを盛り返し、西の方からカラカスに向って進撃してきた。しかしその軍隊は女、子供も老人も何の憐憫もなく切り捨て、略奪し、教会に立てこもった人々を殺戮し、暴虐の限りをつくして進軍を続けているという噂がカラカスに伝わってきた。人々は先を争ってカラカスから逃れようとし、グアイラ港への道は馬車や避難する人々でごった返し、混乱を極めた。

一方、王政を奉じ、独立を忌み嫌うマリア・アントニアにとって、王権派の到来は待ち望んでいたことであり、カラカスを立ち去る意思は全くなかった。これまでスペイン人

のためにつくしてきた自分たちの生命と財産に敬意が払われることを信じて疑わなかったのだ。だがボリバルはまったく逆に、姉の一家は自分と血が繋がっているというだけで迫害されると考え、部下を遣って一家をグアイラ港まで運ばせ、港を出る最初の船に無理やりに乗せてしまったのだ。後になってボリバルのこの措置は正しかったことが分かる。ありったけの勲章を付けた正装で王権派の軍を出迎えたグランハ伯爵は、歓迎の言葉を口にする前に、黒人司令官に一刀のもとに斬り捨てられ、勲章を全部剥ぎ取られてしまったのだ。これを見たカラカス市民2万人は雪崩をうって共和国軍と共に東へ逃げた。23日かかってどうにかカラカスの東方740キロにあるバルセロナの港まで着くと、今度はスペイン艦隊の海上からの砲撃に遭う。マリア・アントニアの一家は幸いにも、その頃もうキュラソーにいた。1814年7月であった。ボリバルはしばらく抗戦を続けたが、翌年国外へ脱出した。

年老いた病身の夫と4人の子供を抱えたマリア・アントニアの生活は一変し、亡命生活のすべてが彼女の肩にかかって来た。弟のお陰で、砂糖きび農園、カカオ園、大勢の奴隷、数多い貸家など全ての財産を捨てて、無理やり亡命させられた彼女は憤懣やる方ない。すぐにカラカスのアウディエンシア（王室の行政府）に、帰国許可を求める手紙を何度も書くが返事はない。自分は一度だって弟に同調したことはなく、身を挺してスペイン人を助けたのだ。しかし考えてみれば女からの、しかも国王の敵ボリバルという名が署名された手紙など、誰からも取り合ってもらえるはずがなかった。そこで彼女はキュラソーを出て王権派の拠点となっているハバナに移り、有力者を介して、今度は直接スペイン本国に、「もし自分に罪があるとすれば唯一考

えられるのはボリバルという姓をもつことだけで、それを理由に財産を剥奪されるのは理不尽である。亡命は自分の意思ではなく強制されたものであり、自分は常に国王陛下の忠実な臣下であった。このことは誰もが知っている事実である」と訴えた。1817年秋になってようやくアウディエンシアは彼女の言い分を認め帰国を許可する。しかしカラカスの治安が悪化し、食料不足が慢性化していると伝え聞くと、彼女は帰国を諦め、代りに王室から年金が給付されることになった。

1821年夏、彼女のもとに、三たび勝利者となってカラカスに帰還した弟シモンから戻ってくるようにという手紙が届く。夫は亡くなり、長男アナクレトはすでにベネズエラに帰り、長女は結婚して子供がいる。あと娘と息子がいるが、王室からの給付金は弟が政権の座に返り咲いた時点で打ち切られ、ハバナでの生活に将来の展望はなかった。何よりも残してきた財産が気がかりであった。46才の未亡人マリア・アントニアは子供3人、孫5人を連れて、8年ぶりに故郷の土を踏んだ。旅費150ペソは弟からの送金であった。

カラカスの荒れようは想像以上だった。地震で崩れた建物も内戦の跡もまだ殆どそのまま放置され、多くの親類が夫や息子を亡くし、財産を失い、あらゆる不幸に見舞われ、誰もが飢えていた。亡くなった弟フアン・ピセンテの内妻ホセファは三人の子供と共にボリバルの家に住み、子供たちはボリバル姓を名乗っていた。マリア・アントニアと違って、ボリバルの側について戦った夫と長男を戦乱で亡くした妹のフアナも、娘と共に亡命先から戻っていた。マリア・アントニアは自分の家族ばかりか、親を亡くした親戚の子供5人を引き取らねばならなかった。家長である弟ボリバルは若くして妻を亡くして以来家族を持たず、アメリカの解放に身を捧げると宣

言して南米諸国の独立のために戦っていてカラカスにはほとんど帰ってこない。一族の責任を背負った彼女は全生命をかけて財産を守る決意をする。そのためにはあらゆる人と争わねばならず、誰の助けも得ることはできなかった。まず長男アナクレト。子供のいないボリバルはこの甥を自分の財産の管理人にしていたが、情けないことに彼は賭け事に身をもち崩し、いつも借金取りに追われているありさまで、マリア・アントニアはボリバルを説得し、財産管理人を自分に変えさせた。従兄弟や伯父に対しても訴訟を起こし、財産を取り戻し、あるいはきっちりと借料を取り立てるようにする。弟の内妻ホセファは同じ階級の出でなく正式に結婚してもいないのに、ボリバルの家に住みこんで、しかも収入を得るために部屋を貸していた。父母の家に誰とも分からない下層の人間が出入りするのに我慢がならず、マリア・アントニアはホセファをそこから追い出して郊外の家に移らせた。妹のフアナはグアイラにある借家から収入を得ていたが、マリア・アントニアはその家を修理するからと言って引き渡させる。鷹揚なボリバルはさまざまな縁のある人に年金を与えて支援していたが、それも片っ端から整理した。これらの案件のために、南米を転戦しているボリバルと彼女の間にはおびただしい数の書簡が交換された。1810 年以来仲たがいでいた二人の間のわだかまりはその中で氷解し、お互いに姉弟らしい思いやりや忠告が溢れるようになる。ただ一つ、最後まで残った問題以外は・・・。

ボリバルは一族の財産のほとんど総てを姉の管理下においたが、アロア鉱山だけは自分の老後のために取っておいた。それをイギリスの会社に貸そうとした時、昔そこを借り受けて経営していた家族が、その一部は自分のものだと言った。マリア・アントニアは訴

訟手続き一切を引き受け、相手と戦う。しかし問題は紛糾するばかりで、そのうちボリバルは戦いを続けるための軍資金が必要となり、鉱山を売ろうとした。買い手は同じイギリスの会社である。ボリバルは係争の相手が要求する金額を払って売る手続きに入ろうとしたが、マリア・アントニアは頑として聞き入れない。裁判は長引き、その間にもボリバルの借金は雪だるま式に増えていき、政治的にも経済的にも追い詰めてられていった。最後には「姉は私が死んだら鉱山を自分のものにしたいくて、売却の邪魔をしているのだろうか」とまで親戚に宛てた手紙に漏らし、とうとう彼女をこの手続きから外して売却してしまった。しかし時すでに遅く、彼にはもうその金を使う時間は残されていなかった。ボリバルが構想した大コロンビア共和国は分裂し、間もなく彼も失意のうちに死ぬ。

ボリバルは革命に財産を使い尽くしてしまったというのが通説だが、それは正しくないようだ。荘園や家、奴隷、一族の家長財産などの莫大な財産は革命や親類縁者への支援、あるいは奴隷の解放などである程度目減りしたとはいえ、アロアの鉱山は 4 万ポンドで売っていたし、他にも財産はまだまだ残っていた。遺産の分配をめぐるふたりの姉妹、ホセファの間で壮絶な争いが起こったことは想像に難くないが、最終的には彼女たちは奇跡的な和解を果たし、財産は 3 人の女性と甥姪たちの間で円満に分けられた。ボリバルより 10 年長生きしたマリア・アントニアは弟の名誉が回復され、遺骨がカラカスに戻ってくる寸前に亡くなった。驚いたことにその死後、彼女の隠し子だという女性が二人も現れた。いずれも彼女が結婚したばかりの、まだ若い頃に生まれており、定期的に養育費や贈り物を受け取っていたといい、一人は父親の名まで分かっている。

その後、独立の英雄として神聖化されたシモン・ボリバルに、独立に反対した、しかも醜聞に満ちた肉親がいたとあっては具合が悪いと考えられたのであろうか、マリア・アントニアについては、早く母を亡くした英雄を慈しんで育てた姉、としか語られてこなかっ

た。歴史の闇に封印されていたこの女性をさまざまな資料を駆使して赤裸々に蘇らせたのは、ベネズエラ的女性歴史家イネス・キンテロ氏である。

(いとう・しげこ)

〔ラテンアメリカ参考図書案内〕

『他者の帝国ーインカはいかにして「帝国」となったか』

関 雄二・染田秀藤編 世界思想社 2008 年 3 月
391 頁 3,600 円＋税

ペルー先住民出身のトレド前大統領は、しばしばその政治パフォーマンスや政策にインカのイメージを多用した。そのポーズは、インカの固定的イメージがすでにあることを感じさせる。また、インカ「帝国」と一般的に呼ばれているが、「帝国」とはそもそもどういう概念で、インカが「帝国」だったのかという検証はあまりなされていない。本書は、アンデス、イベリア半島史を専門とする考古学、スペイン植民地史、文化人類学の気鋭の研究者 15 人による総合的なインカ「帝国」検証論集である。

まずインカを帝国とみなしたのがスペイン植民地の記録者クロニスタであり、その「帝国」なるイメージが古代ローマに端を発する概念であることを、歴史研究から迫るとともに、ペルーにおける考古学は文明の起源に関心が向けられ、アンデス文明の集大成であったインカに歴史的アイデンティティを求める動きはなかったことを指摘している。

続く実態研究は、これまでのインカ像に基づく研究に再考を促す論文が 7 編載っている。クロニスタによるインカの儀礼記録にみる王位継承概念が西欧のそれとは異なること、市場がスペイン人の持ち込んだ物資交換の場であるとする説より早くインカの時代からあったこと、インカ期の村落と国家の関係などを、歴史、文化人類学の立場から究明している。また、考古学調査からこれまでのインカのクスコ起源説の危うさを示唆し、景観考古学の手法による太陽神殿の場所決定の意図探求、地方での武力抗争の有無を確認することによるクロニカの記述を検証している。

第三部はインカのイメージの帰属と流用について、植民地時代での被征服者との関係の変遷、インカを描いた絵画にみる対先住民政治、メシア伝承にみられるアンデス住民のインカとの歴史的連続性の有無、そして最後に現代の都市に移住してきた先住民や混血(チョロ)の音楽や言動、嗜好などがペルー人のアイデンティティに包摂されつつあることを指摘している。どれも真摯な研究による成果であり、編者の全体構成の理解を助ける解説とともに、専門書ながらアンデス文明に関心のある一般読者にも興味深く読める。

〔桜井 敏浩〕